
Past/Sixth

kuxu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P a s t / S i x t h

【Nコード】

N 1 3 6 1 S

【作者名】

k u x u

【あらすじ】

ある下町に経っている一つのアパート「自由壮」。そこに住んでいるのは小学生の子供4人。一之瀬美紀、羽衣結衣、朧今宵、水戸透。そしてそのアパートの代理大家の主人公、優輝晃。その義妹、優輝真。

6人は幼馴染でいつも一緒に行動している。
ある日不思議な石を拾いその日から不思議で最悪の日が始まる。

（前書き）

始めましてkuxuです。

がんばって書きました。どうか温かい目で見てやってください。
お願いします。

東京にある下町。東皆丘町ひがしみなおかまちにある一軒のアパートがあった。

そのアパートの名前は自由壮じゆうそうには6個部屋があるが今いるのは4号室のみだった。自由壮の隣にはそのアパートの大家の優輝家が住んでいた。

時は夏が終わった9月の朝。

「ほら、晃、真、早く起きなさい」

母の優輝心ゆうきしんが子供を大声で呼んでいる。

「俺は起きてるぞ母さん」

兄、優輝晃ゆうきあきらがテーブルの椅子に座りながら言った。

「あらそう。真は？」

「いつもどおり寝ています」

「もう。ちゃんと起きなきゃだめなのに」

心は晃の前に朝ごはんを置きながら言った。

晃はご飯を食べながら。

「じゃああとでほかのやつも起こしに行くからな」

5分後。

「おはよう」

妹の真が起きてきた。

優輝真妹といっても義理で年齢も変わらないが誕生日の差で晃が兄となっている。そして真には本当の親はいない。髪はロングの金髪ですこしふわふわしている。目の色は水色

「ごちそうさま」

「あれ？あきにいつも食べ終わったの？」

真が寝ぼけながら言った。

「そうだ。だから俺は今からみんなを起こしに行くからな」

そついつて晃は家を出た。

晃は隣のアパートの1号室のドアを開けた。

「おーい美紀^{みき}起きろー」

そついいながら晃は部屋に上がった。

しかし美紀はいまだに寝ていた。晃が起こそうとしたとき美紀は寝言を言った。

「えへへへ。二日酔いで頭が痛いぜよ」

「どうゆう寝言だ。しかもまだ俺達は小学生だろ」

しかもなんであんまり親が帰ってこない人がこんな言葉を覚えている！

「ほら、朝だ。飯も出来ているぞ」

「本当！ー！」

美紀は速攻で起き出した。

―ガツン!!

晃は一発美紀の頭に拳骨をぶつけた。

「いたいよ〜アッキー」

「痛いよ〜じゃねえ。やっぱり起きていやがったな」

しかし美紀はそんなことは聞かずに優輝家に飛び出していった。

いちのせみき

一之瀬美紀。親が両働きでここで暮らしている。歳は9歳晃と同じく小学4年生。赤色の髪で少し長い髪をツインテールにしている。目の色は青

（まあいいか。次行こう）

そう思いながら晃は隣の部屋、2号室に行った。

「お〜い。結衣起きているか〜」

晃は部屋に入った。

「あ、アキ君」

結衣は上布団を足にかけ起き掛けの状態だった。

「おはよう結衣。朝ごはんもう出来ているぞ」

「うん。すぐに行くね」

「おう」

そう言つて晃は部屋を出た。

羽衣結衣^{はいうもゆい}。収載は美紀と同じ。しかし性格は違う。髪は水色でストリートロングにしており左前髪に星型の髪止めをしている。目の色は紫。

次は上の階に晃は行つた。

3号室にに來たがもう部屋からでてこつちの來る準備は済ませてあつた。

「お、珍しく早いな今宵」

「おはよう晃今からそつちに行くね」

今宵は晃気づき挨拶をした。

「ああ。でもその前に透を起こさなきゃだめだな」

そついつて晃と今宵は4号室に入つた。

布団で寝ている透に2人は思いつき蹴りを入れた。

「ゴハッ!!」

透は噴出しながら叫んだ。

「あ、おまえらまたこの起こし方かよ!!」

「いいから早くこつちに來い」

そつ言つて晃と今宵は部屋を出て優輝家に向かつた。

朧^{おぼろこよい}今宵冷静ながら晃と美紀の暴走止め役。同い年。髪は紫でポニテール^{みことある}にしている。目の色は黄色

水戸透晃と同い年の男子。性格は晃と似ているだが暴走しない。髪は金髪で目の色は緑。

あとは6号室まであるが今は人はいない。

「ただいま」

「お邪魔します」

晃と今宵が家に入った。

「おう来たなこよつち。早く朝ごはん食べようぜ」

美紀が朝から張り切りながら言った。

「アキ君はもう食べたんでしょ」

結衣が晃に聞いた。

「ああ」

「オッス」

透が家に入ってきた。ちなみに今はみんな親が不在中で朝はこうしてみんなで食べている。

15分後全員食べ終わり、学校へ行くこととしている。

「じゃあ晃仕事に行くから3日ぐらい帰らないから」

母の心が仕事にそう言って出かけた。

「全員そろつたな」

晃がランドセルを背負いながら言った。

「いざ、冒険の旅へ」

美紀が叫んだ。

「行かないからな」

晃がツツコンだ。

彼らの通う小学校は下町にあるいかのも古風が漂っている学校である。

今日は水曜日学校は4時間で終わった。

「よし。みんな今日はこそ例のところに行くぞ」

晃が5人を集めて言った。ちなみに晃の親も共働きである。

晃たちは家にランドセルを置いて外で集合した。

「今日こそなんかの不思議を見つけるぞ」

「そんなに簡単に見つかるもんじゃないと思うが」

張り切っている晃の横に今宵が冷静にツツコンだ。

「でもいいじゃないこんなのも」

結衣がフォローした。

晃たちが向かったのは小学校の裏山でありそんなに高くはないので小学生の遊び場になっている。

「そろそろ秋になるねえ」

美紀が言った。

「そうだな。そうなったらまたみんなできのこ狩りでもするか」
「うん」

晃の提案に美紀が賛成した。

「でもここになんて本当に不思議なんてあるのか？」
「あるぞ。たぶん。テレビで言っていたぞ」
「おまえな」

晃の気まぐれに今宵は心配のため息をついた。

「あきにい。あそこに鳥がいる」

真が晃を呼んだ。晃は走っていった。しかしそれが悪かった。
草むらに足を入れたとき、いきなり足がすべり下に落ちていった。

「イテツ！！なんだここは」
「大丈夫？アキ君？」

いきなり落ちて行った晃を心配して結衣が声をかけてきた。

「大丈夫だ。でもなんかここに変な洞窟があった」

晃の目の前になんか明かりがついた洞窟があった。

「ええ、大丈夫なのそれ？」

結衣は驚きながら言った。

「いいじゃん。入ってみようよ」

美紀はそういういながら下に降りてきた。高さはそんなにないので気をつければ見みたいに落ちたりはしないはず。

「僕も行こうと。でもなんかお化けとかでたら面白いね」

透が面白半分で言った。

「変なことを言わないで」

「ばか！！透。さらに入りにくくなってるじゃないの」

真と結衣が叫んだ。

「大丈夫。なんか明かりがついているからお化けなんてでないだろうよ」

晃が安心できるように言った。

晃たちは洞窟を突き進んでいた。

「でもなんでこんなに中は明るいんだ？」

晃が質問した。

「アッキーが分からない事をわたしがわかるわけないじゃん」
「自然には不思議がいっぱいだからな」

透が笑いながら言った。

「それを俺達が見つけに来たんだ」

そついいながら晃は怖からずに前に進んだ。

「ねえアッキーあそこにもっと大きい光が見えるよ」

そついわれた晃たちはその光に向かって歩いた。その大きい光があるところに行ったら。そしたら広いところに出た。

「ここはどこだ」

透が言った。

「私に分かるわけないでしょ。ねえあきにいそろそろ戻ろつよ」

真が怖がりながら言った。

「でもなんか不思議なところだな」

そんなことはどうでもいい。晃と美紀以外の4人はあきれていた。

「アッキーこれみて」

美紀に呼ばれて晃たちは美紀の所に行った。

「なんだこれは？美紀」

なんとそこには小さいくぼみに赤い石がはまっていた。

「知らないよ。でもなんか不思議な気分なんだ」

そう言ってその石を美紀が触ろうとしたとき、いきなり取れた。美紀はいそいで石をキャッチした。

「なんか取れちゃったね」

「そうだな」

「ねえなんかここにも同じようなものがあるよ」

結衣が見つけたらしく呼んできた。そこにはさっきと同じ形だが色は青色の石があった。

「触ってみようか」

美紀が触りだした。しかしさっきのように落ちたりはしなかった。

「わ、私が触ってみるね」

そう言って結衣が触ろうとしたとき同じくさっきのようにいきなり石が落ちてきた。

それを結衣は両手で受け止めた。

（これはいい）

「ねえあきにいここにも黄色の石があるよ」

「え！？」

真がまた違う石を見つけた。しかも次は黄色だった。

「ここにもあるぞ。緑だけど」

「僕のところにも。色は茶色だ」

今宵も透も見つけたらしい。3人とも同じように触ろうとしたが同じように落ちてしまった。

「これはいったいなんだんだ」

そう言ったあと今宵はこの広場の真ん中で変化が起きていることに気づいた。

そこには石の柱が5本が円を描くように生えており、真ん中には小学生ぐらいの小さい机の上に白い石があった。

「なんだ。これは。あ、おい晃！？どうした」

晃はそこへ向かうようにゆっくり歩いていた。

「おい、晃近寄んないほうがいいって」

しかし透が言っている事は無視するかのように晃は歩き続けている。

「なんか足が止まらない」

そう言っているうちに晃は石のあるところについてしまい、その石に触れてみた。

（なんだこの感じ）

そう思ったところにはもう遅かった。晃は石を手にとっていた。それを合図みたいに6本の柱が1人1本つつ白い光が5個の石に当たった。そのあとその光は晃達全員を包み込んだ。

晃は目を開けたそこにはさつき入って行った洞窟の入り口のところで全員寝ていた。しかし洞窟の入り口はそこには無かった。

（さつきのいつたい）

そう思った後いきなりみんなが起きだした。

「あれ。アッキー？ここはどこ？」

「さつきの洞窟の入り口だ」

「でもアキ君どこにも入り口は無いよ」

「それは俺もわからない」

「さつきのは行ったんだったんだ」

「あきにい。おなか減ったよ」

「よしじゃあ帰ろうか」

おー。と全員片手を挙げた。そのとき晃はあることに気づいた。

「そうだ。さつきの石は」

「あれ。ここにあるよ」

結衣が晃の左手首にさつきの白い石の腕輪に指を差した。

「おまえにもあるぞ」

晃は結衣の左手首にさっきの青い石の腕輪に指を差した。

「え、本当！？じゃあおそろいだね」

結衣はうれしかったらしく喜んでいる。

「わたしのも在ったぞ」

美紀がそういったあと結衣の喜ぶ顔が消えた。

そのあとほかの3人にも石には腕輪が付いていた。しかも全員ちがう色だが腕輪は同じデザインだった。

そのあと晃達は家に帰った。

場所は優輝家。

「なんだんだ。この腕輪は？」

晃が腕輪を睨みながら言った。

「さあね。でもデザインは悪くないよね」

テレビを見ながら真は答えた。

「まあそうだけど」

「でもなんか夢だとは思えない体験はしたよね

あんなに怖がっていた真に驚きの言葉が出た。

「まあそうだな」

晃は吹っ切れたようだ。そのまま立ち上がった。

「じゃあそろそろ寝ようか。真、テレビ消せ」

「いやだ」

「オイ!!」

小学校。晃は昼休み校庭で男友達とドッチボールをして遊んでいた。しかし彼以外は教室にいた。みんなは昨日のことは誰にも話さなかった。いや、話すことが出来なかった。まだ全員、あれが現実だったのか夢だったのかを悩んでいた。

でもあれが現実とゆう証拠はあった。腕輪だ。

しかし全員その腕輪は付けていた。理由はわからない。朝は全員その腕輪を付けていたのは知っているでも理由は聞かなかった。まるでいままで付けていたかのように。

全員が集まっても昨日の話題は無かった。まるで記憶が消されたかのように。

帰り道昨日の話題がやっとでた。

「この腕輪。なんか付けていると落ち着くような気がする」

晃がボソツと言った。

「やっぱりアッキーもそう感じる？実はわたしも」

「みっちゃんもやっぱりそう思うんだ。でもやっぱり昨日のこととは思えないよね。ねえいっちゃんはどう思う？」

真が今宵に聞いてみた。

「私も3人の意見は賛成だ。でもこれを付けているとなんか不思議なことが起こりそうな気がする」

「まあその石が不思議なことだけだね」

透が口を挟んだ。

「でも不幸なことは起きたくは無いよね」

結衣が言った。

「でも今日不思議なことはあつたけど」

「へえ」なにアキ君聞かせて聞かせて」

「全員が今日起こさないで起きたこと」

バ力にするな。とその後晃はお叱りを受けた。

（でもやっぱり不思議だ）

こうまでしても不思議にされる5人の朝の弱さとはどれほどなのか。

次の日。今日は晃と真の親が帰ってくる日だ。晃と真の親は山で秘密な仕事をしているらしい。詳しいことは聞かされてはいない。実際、今の自由社は母の母が作った建物でそれまでは彼女とその夫が大家をやっていた。しかし2人とも同じ時期に病気で他界。そのあと娘の心が大家をやっているが、ときどき夫のつまり晃の父親の進しんの仕事のお手伝いをしているため、今は晃が3代目の大家として勤めている。

父親は滅多に家には帰らない。そのため今は父の故郷で暮らしているらしい。ちなみに場所は下町とはちがう科学都市で暮らしている。父は今は母つまり晃の祖母しかない家の手伝いをしている。ちなみに祖母の年齢は92歳だ。

学校は終わり晃たちは優輝家でお茶をしていた。すっかり石の話は出てきていない。

「そういえば最近ピアノは続けているのか？」

晃が結衣に聞いてみた。

「うん。だって楽しいもん」

結衣は笑顔で答えた。

「そうか。今宵の絵もどんどん上達していくしな」

「今描いているの見てみる」

そういつて今宵は持っているスケッチブックを晃達に見せた。しかしそこにはホラーと言っしかない絵が描いてあった。

「なんでお前はそんな絵しかかけないんだよ」

・・・沈黙。

——ニヤツ。

いきなり今宵は不適に笑い出した。

「ねえアッキーなんかご飯作ってー」

「私もみつちゃんに賛成」

「なんで晩御飯後にご飯を食べるんだよ。却下だ却下」
「ブー。アッキーのけち」

そのとき家の電話がいきなり鳴り出した。

「ああ。はいはい」

晃は受話器を取った。

「はい。優輝ですけど。え！？それ本当！はい。わかりました」

電話は手短く終わったのにいきなり晃は受話器を手から離し、膝を着いた。

「どうしたのアッキー」

「嘘だろ」

しかし晃の声は小さかった。

「え！？なにアキ君」

「親父達が病院に運ばれた」

・・・一時沈黙。

「「「「ええええええ」」」」

全員現状がわかったらしく大声を出した。

「それ本当あきにい」

一番驚いているのは真だった。

「ああ」

「母さんは無事なの？」

晃は泣きながら答えた。

「いや、母さんも同じで、生きることすらわからない状態にいるらしい」

「うそ」

それを聞いて真から、いやここにいる全員の目から涙が流れた。

こらえきれなくなつたのか晃はどんどん力が入らない状態で倒れかけてしまっている。

結衣が晃を泣きながら支えて、頭をなでた。

真も同じ形で今宵に支えてもらっている。

いまの2人には声を出す力も無い。

そのとき家のインターホンが鳴った。

「晃君、真ちゃんはいるか？」

美紀がドアを開けた瞬間、1人の男が家に上がってきた。しかしその人物は全員が良く知る人物だった。

「町長のおじさん」

「話は聞いた2人は今から2人が運ばれた病院へ連れて行く。いいか？」

その言葉に晃は一瞬悩んだがすぐに答えはでた。

「お願いします」

「よきた。ほかの4人も後で連れて行かせるからな。今はこの2人にか出来ないことをやってもらう」

「2人しかできないこと？」

結衣が聞いてきた。

「近くで見守ってやることさ」

そっぴいなから町長のおじさんは2人を車に乗せ、大急ぎに車を走らせた。

——どうか無事にいてくれ。

晃と真はそう願っていた。

3時間後、もう夜9時ぐらいの時間だ。東皆丘から学園都市はけっこう差がある。

「2人はどうですか」

町長が病院の人と話をしている。

「いまは2人とも命はありますが非常に危険な状態です」
「くそ」

町長は話を終えた後、手術室前の椅子に座っている晃と真の近くに

来た。

2人とも手を繋いでおり声も出ない力でぎゅっと握っていた。2人ともショックを受けながらも2人の生存を望んだ。

さらに4時間後。おじさんは残りの4人を連れてくるため一回戻っていた。

2人はさつきと変わらず起きていた。

そのとき、手術中のランプが消えた。30分後一人の医者が出てきて、晃達に伝えた。

「残念ながらもう手遅れです」

――嘘だろ。

その言葉を聞いた真はまた大声で泣いてしまった。そのまま晃の胸へ飛びついた。晃は泣きながら真の頭をなでていた。

2時間後ほかの4人も来たが、真実を聞いて泣いていた。

1週間後。東皆丘。この日は優輝家夫妻の葬式の日だった。同時に晃が別の土地へ移る日でもあった。父親が死んだ今、科学都市にいる祖母を養わなければならない。そのため、晃が科学都市へ行くことになった。

葬式が終わった後東皆丘の最寄り駅に行った。そこで晃とお別れとなってしまう。いつ帰ってくるかは謎だった。ちなみに科学都市では電話以外で東皆丘の連絡手段は無い。ついでに電話代は馬鹿でかい。

「必ずまた会えるよね」

結衣が半泣きで言った。

「ああ。必ず」

「あっちに行っても元気に生活しろよ」

美紀が親指を突き立てながら言った。

「お前もな」

「がんばってねあきに。私もがんばるから」

真が晃の左腕を包みながら言った。

「ああ。がんばる」

「いつか私の絵も見に来いよ」

今宵が肩を叩きながら言った。

「ああ」

「あっちの生活に慣れるなよ」

透が笑いながら言った。

「それは無理だ」

キツパリ晃は言い張った。

「そこは断れよ」

しかしこの声は電車の音で聞こえなかった。

「電車来たよアッキー」

「ああ。じゃあみんな元気でまた会いに行くからな」

そういつて晃は電車に乗った。

これがみんなとの最後の記憶だった。

あれから7年後。

夏が終わり始めの頃。

ある一人の少年が東皆丘の地面を踏んだ。年齢は16歳、高校1年生。

髪は白く、顔は冷静な顔立ちをしていた。

右手首には黒いリストバンド。しかしそこには小さく傷跡が見える。左手首には白い石がついている腕輪を付けていた。

「ここでまた僕の生活が始まるのですね」

彼はボソツと言った。

彼の名前は……優輝晃。

（後書き）

始めましてkuxuです。

どうでしたかP a s t / S i x t hは。すこし単純なところもありましたけれどもそれでも満足してもらえたら幸いです。

そしてこの話は新しく連載させるつもりでいるF r e e d o m / S t o r yに引き継ぎます。

話は7年後の話で、キャラクターは変えませんが、ではまた会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1361s/>

Past/Sixth

2011年8月8日04時45分発行